

平成 30 年度津島市まち・ひと・しごと創生総合戦略推進委員会

開催日：平成 30 年 10 月 4 日

場 所：市役所 5 階 第 1 委員会室

【配布資料】

資料 1 津島市まち・ひと・しごと創生総合戦略推進委員会委員名簿

資料 2 平成 30 年度 津島市まち・ひと・しごと創生総合戦略 重点戦略の状況

資料 3 津島市まち・ひと・しごと創生総合戦略進捗管理資料（平成 30 年度）

開会

挨拶

（日比市長）

みなさま、おはようございます。今日は津島市のまち・ひと・しごと創生総合戦略推進委員会にお忙しいところお出かけいただきありがとうございます。津島市以外でも多くの市町が人口減少・少子高齢化というような課題に直面しています。その課題に立ち向かうために、平成 27 年度に地方版総合戦略、津島市まち・ひと・しごと創生総合戦略を策定しました。本日は総合戦略の進捗について主に説明しますので、総合戦略のさらなる進展、事業展開のためにみなさんの忌憚のないご意見をいただきたいと思えます。委員の皆様におかれましては、引き続き津島市まち・ひと・しごと創生総合戦略にご協力をお願いいたします。みなさまのご健勝をお祈りいたしまして冒頭のあいさつにさせていただきます。今日の会議が実りあるものになるとご期待申し上げます。

資料確認

委員紹介

事務局紹介

次第 1 議題

津島市まち・ひと・しごと創生総合戦略の進捗について

「重点戦略 1 20～30 歳代の女性の転出を抑制する」の進捗について事務局より説明

（委員長）

それでは委員の皆さんからご意見、ご質問等があればいただきたいと思います。いかがか。

質問だが、A3 の資料の左下の実績、年代別、5 歳刻みで、女性の転出超過だが、これを見て思うことを少し。26 年度の非常に転出超過が高いものの、それ以降は若干だが、抑制傾向がみられる。重点戦略 1 の対象は 20 歳代から 30 歳代だが、20 歳代前半の転出を左右する要因は子育て環境よりも就職等になる。特に就職にまつわる移動なので、この政策が直接、転出抑制には働きにくい。この中でメインとなるのは、30 歳代だと思う。とすると、この政策の効果なのかどうか分からないのだが、収まっているなど。特に直近では、30 歳代に関して

はほぼイーブンになっているので、この数字を見ると、まあまあいいかなという感じもする。一方で、住宅着工は、津島は近隣他市と比べると若干弱いかなと思う。住宅着工数が減っているというのは何か理由はあるか。

(企画政策課長)

理由というのは難しいところがあるが、物件等を探している方に対し、住宅供給業者が津島における子育て環境についてネガティブなイメージで話をしているということも耳にしたことがある。これが要因かどうか分からないが、その一つというのも考えられると思う。

(委員長)

特に住宅供給業者の人達が津島は近隣と比べて悪いというような思い込み、刷り込みがあるのであれば、どうしても彼らも津島市よりも違う自治体に家を作った方がいいという判断となり、津島の優先順位が下がってしまうということがある。そこのところがPRという部分でいうと、どうなのか。浸透しつつある、という感じはあるか。

(企画政策課長)

子育て関係については、他市並みくらいはやっているし、単独で子育て応援券事業もやっているもので、充実しているところはあると考える。そのPRを子育てアプリやガイドブック、各公共施設等における周知、子育て支援センターを利用した方から口コミで広げていただいている。

(委員)

住宅着工の点、これは大変重要な問題だと思う。人が増えるには家を建てなければならぬところがあるが、弥富市は着工数が伸びていて、津島市は少ないことについて、違いが何かあると思うのだが、その点いかがか。

(建設産業部長)

弥富市は近年区画整理事業をやっているもので、そういった物理的な要因が考えられる。

(委員長)

そうすると、津島市はやっていないことになってしまうが、そういうことでよいか。

(建設産業部長)

区画整理事業と言うと、大きな区画を再編して住宅街区を作るという事業となるが、津島市で今やっているのは、以前から課題となっている津島市の神守町地内での、用途地域が暫定的に厳しい制限がかかっている地域の解消をやっており、まずはそういったところを魅力的な都市になるような都市計画の変更を進めている。

(委員長)

女性の転出を抑制するためには子育て環境をPRするということと子育て環境を充実させ

るということが、人口増や若い女性の転出を抑制するということで実施したのだが、住宅の供給にも大きな要因があるのではという話になってしまうと、そこに焦点を当てるべきなのかという感じもする。

他の委員の方、ご意見等はいかがか。津島は子育て環境が近隣に比べて劣っているというのは、都市伝説的なもの、ある種の思い込みというのものもあると思うか。そもそも地元の中で、言われているのか、言われていないのかというところを教えてください。

(委員)

都市伝説か、と言われれば、実際に言われているのではないかなと思う。自分には小学生と中学生、高校生の子どもがいるが、まず、第1に言えば医療費助成の話はずっと言われていることで、都市伝説では全くない。一番上の子と下の子との子育てでの違いは、子育て応援券、子育てアプリ。充実は確かにしてきていると思う。ファミリー・サポート・センター事業を利用した際、500円の応援券を使うと、1時間700円のサポート料の自己負担額が少なくなる。子育てアプリの方にもいろいろな情報が入っているので、分かりづらいこと、イベントや制度などの情報が入っているので、役に立ちますよとお伝えすることができると思う。病児・病後児の保育サービスの利用も、もう少し増えるといいなと思うのだが、周知が少し不足しているのではないのかなと思うところもある。またこれからもたくさん色んなことが増えていけばいいなと思う。

(委員長)

津島の強いところもいくつかあって、評価してもらっているところもある。けども一部分は周知がまだまだ足りないということもある。残念ながら、子ども医療費助成の関係はやっぱり目立つ要素、見た目に分かりやすいものなので、そここのところで差がついてしまい、逆に言うとそこを切り取られてしまい、津島市が弱いと言われていると思う。そこが肝になっているという感じだろうか。

(健康福祉部長)

津島市としては、子育て応援券事業や子育て支援センター事業に取り組み、子育て事業を充実させてきた。先ほど委員がおっしゃったように、子ども医療費助成の基準が他市町村と比較して低いことが、子育てが弱いというイメージに代わってしまっているのが実情かと思う。しかしながら、現在、新年度4月から、子ども医療費助成の対象範囲の拡大ということで、取組の準備を始めているので、今後はそういったイメージも解消されていき、若しくは他市より良い状況になるのではと考えている。

(委員長)

大きなネックが解消される方向に進むということと、他に良いところがあるので、今後、良い方向に向かうことは期待できると思う。

「重点戦略2 就職期の若者の転出を抑制する」の進捗について、事務局より説明

(委員長)

A3 の資料の左下の方、20 歳代の転出者数グラフで、過去 6 年間のトレンドとして、特に 20 歳代の前半の方の転出が増えているという流れが見えるが、この辺は、当初行った様々な分析の内容が基本的に変わっていないというふうに捉えられているか。

(企画政策課長)

転出している要因は把握していない。

(委員長)

企業誘致の実績で、どのような企業が来ているか把握しているか。

(建設産業部長)

28 年度末 1 件、29 年度末 2 件だが、津島市は都市計画法を活用して、通常でいうと、市街化調整区域、いわゆる農地の広がった、市街化を抑制する区域なのだが、そういったところで開発できるような制度を活用し市内 3 か所にエリアを設定して、企業誘致を進めており、その効果が徐々に出てきていて、この数字となっている。従来なら開発できなかったものが、開発できるような制度を活用し、最近、市内で着工されるようになり、その結果になっている。業種については、基本的に製造業となっており、主に自動車関係の製造業の会社で、結果として報告しているのは 29 年度までで 3 件だが、実際、30 年度も好調に推移しており、5 件となっている。製造業を中心とした業種の工場が順調に着工している状況である。

(委員)

津島市に進出を決定した決め手は何と考えるか。

(建設産業部長)

まず、決定した大きな理由だが、従来は市街化調整区域でその業種であれば、開発ができない、という状況の中で、津島市で条例を作り、開発をできるようにした。さらに今、具体的には、津島市の白浜町、宇治町、鹿伏兎町で、区域と業種を設定して、開発できる規模も 3,000 平米から 50,000 平米という要件があるが、その要件を市の条例で独自に設定した。名古屋市西部の企業が、本当は工場を拡張したいのだけれど拡張できない、名古屋の西部に出たいのだが要件を満たしていない、津島市はそういう要件を満たした条例を作って、企業誘致をやっているし、担当もワンストップ窓口で誘致だけでなくその後のフォローもやっているため、最近、問い合わせの件数も増えている。制度的な話と人的な話が大きな要因になっているのだと思う。

(委員長)

ちなみにそこで働いている人は、地元で、若い子が新規雇用されているのか、その事業者がもともと雇っていた人がそのまま雇用されているのか、どちらか。後者であれば、それは転入の要因になるので、悪いことではない。どういう人が働いているのかなかなか掴みづらいことではあるが、把握しているか。

(建設産業部長)

確かに工場の増設、または本社ごと移転している企業もある。事業を継続している工場をいったん廃止して、移転して新規で作る形になるので、やはり、従業員の方を引っ張ってきているので、従来の雇用形態を維持しながら、津島市に会社ができただけで、異動されてやっているといるものもある。現時点では、工場ができただけからと言って、若者が今すぐに雇用される、という状況ではないが、大きなニーズとしては、地元で雇用したいという話をよく聞く。従来の従業員の方が継続して勤めているということだが、今後はそういった波及効果も期待しているという状況である。

(委員)

当社の新入社員にはこの地域に引っ越してもらおうのだが、ほぼ毎年蟹江町に引っ越す。会社は津島市にあるのだが、津島は交通の便が不便。津島駅の周辺となると、値段とのバランスが取れない。津島線が不便だと、近鉄名古屋線沿線に行ってしまう。市長や商工会議所の会頭たちが名鉄に毎年陳情に行っているという話を聞いていたが、インフラ関係、駅前開発、名鉄線の利便性については、改めて問題だと思う。また、先ほどハローワークが色々な企業の合同説明会を行っている旨の説明を受けたが、最近、近隣市から市内の企業PR動画を作ってくれと注文があった。津島市もそういった地元企業のPRをやられてはいいかと思うと発言した。

(委員長)

地元の企業のPRについては、色々な取組がされていると思うが、地元の若者は地元の企業を敬遠する傾向があるのか。地元の企業の給料が安いから地元就職したくないという話もあったが、実際にはどうなのか。

(委員)

給料が高いから、低いから、というのは正直聞いたことはない。例えば、当社の新卒採用の際は、高校の方に声をかけ、高校から何人か試験に来ていただいている。

(委員)

若者と話をする機会が結構多い。就職時期、進学時期に進路を尋ねると、まず、遠く。そして名前が通ったところを挙げる。企業のPR動画を作られる話があったが、若者たちにとっては魅力的なものだと思う。津島市ではそれが少ないので、もっと知名度を上げるような方法を考えられると、若者たちがひょっとすると、食いつく要素になるのではと思う。

もう一つ。若者は給料についてはあまり言わない。何となくという気持ちが若者たちにあるようだ。どうしてそこを選んだのかと聞くと、ただ、学校に応募要項があったからとか、先輩が行っているから選ぶというケースが多い。同級生、先輩の方から伝手を作っておくと、多少、気持ちの向くようにいろいろな交流が出てくる。そう意味でいくと、企業説明会をもっともっとやられて、若い人たちが参加していけるように、地元の高校にお願いされると、また違った面が出てくると思う。このあたりをこまめにやらないといけないうような気がする。

どうも若者というのは、見た目に惹かれる。

(委員長)

もし処遇とかのところで差異がないということであれば、若者が知っている世界の中では、先輩が名古屋の企業に就職したとか、名前が通っているかいないかはすごく大切。そういったなかで、先ほどの発言にもあったが、企業のPRがまだまだ弱い、工夫の余地があるのではないか。説明会でも若者向けのものがあるといいのかもしれないが。身近に感じてもらうというようなやり方が必要なのでは。PR動画もそうだと思う。もしかすると、それをやっているところがあるのではと思う。

「重点戦略3 名古屋市への通勤者の転入を増やす」の進捗について、事務局より説明

(委員長)

先ほど地区計画の決定について説明があったが、それぞれの地区計画の場所というのは駅の近辺か。

(建設産業部長)

神守町と言って、津島市の名古屋市寄りの東部になる。西尾張中央道の幹線道路の周辺になる。昭和60年に新市街地として市街化区域に編入したところ。名古屋駅まではバス路線が中心のエリアとなる。

(委員長)

もう一か所、今年度実施するところもお教えいただきたい。

(建設産業部長)

神守地区を2つのエリアに分けているので、2か所というのは神守町エリアである。この後の次のエリアは市内で3か所ほど考えている。

(委員長)

先ほど委員から就職して新たに蟹江町に住むという話があったが、蟹江町と比較すると鉄道の利便性はかなり違うと思う。蟹江町と津島市の住宅価格の差はどのくらいあるのか。蟹江町には住めないが、津島市には住めるということはあるのか。

(委員)

違いはあまりないと思う。

(企画政策課長)

個人意見になるが、津島に比べると蟹江の方がやや高いのではないかと思います。

(委員長)

その価格差が利便性の差に見合うものかどうか、また少々高くても払える程度のところであればいいかと思うが、鉄道路線というのは確かにそうかもしれない。住宅供給と言うと、駅に近いというのを重視するのも大事な視点となる。津島だと、どうしても名鉄を使うと名古屋に行くまで30分かかるといふこともある。また、そういう点でいうと、名古屋エリアは、通勤に鉄道を使うウエイトが他の大都市圏と比較すると断然低いので、先ほど地区計画の話の際に、名古屋に近い中央道沿いの用途変更の話があったが、勝負所を名古屋に近く、車で通勤できるとするものもある。鉄道という、近隣市に津島より便利なエリアで、あまり価格差がないところがあるので、これも一つのやり方なのではということも思う。今後、駅近エリアでやっていこうという方向性はあるか。

(建設産業部長)

駅近エリアというよりも、津島駅周辺の旧市街地を考えていかなければならない。都市計画も長年計画されていて、道も何年も拡幅されていない天王通りの在り方とか、津島駅を中心とした駅の玄関口、津島市の顔になるので、長期的な視野になるが、再整備を含め、今後の予定としては、総合計画の下に都市計画マスタープランがあるが、そういったところで、駅の役割や在り方を明記しながら、位置づけをしていきたいと思う。来年度から策定に入るので考えていきたいと思う。

(委員長)

私は、津島市へは一宮から電車に乗って、尾西線で来るが、津島駅の改札を出たところの喫茶店が閉まっているのを見ると寂しく感じる。津島駅は名古屋駅から遠いといっても30分程度で、この西尾張の中心性を持った場所。周りから見ると、センターにあることには間違いないので、その辺りを意識されて勝負するのはいいと思う。

(委員)

3の資料の転入元別のグラフについてだが、年齢分布が分かるものはあるか。津島の文化に親しんで、余生を過ごしている方もいるが、私たちの中では、20歳代～30歳代、働き盛りの方に転入していただくことが大切だと考える。そのために1のような子育て関係の支援をやっているのだと思うし、その部分は他の行政と比較して高いものだと思うので、転入されてきている方の層は一体どのくらいの世代の方たちなのか知りたい。30歳代、40歳代、50歳代と分けた時にどのあたりが一番多いのか、その辺の資料はあるか。本来、名古屋から転入される方に関しては、働き盛りの子育てをしている世代の方にこの地域がいいとPRし、住んでいただくこと、長い目で見れば人口増加の部分で、一番のターゲットになるのかなと思う。1の資料に関しては、その人たちが減っているのではないかという見方もできるので、この辺の部分は明確な資料の中でスポットを当てていった方がもうちょっと絞った議論ができるのではないかと思う。

(委員長)

転入者の年代が分かる資料はあるか。例えば名古屋から転入してきている人は、若い人が

多いのか、高齢者が多いのか。

(企画政策課長)

名古屋市からの津島市の転入者は、他の年代と比べて20～30歳代が多い。

(委員長)

20歳代で転入された方は婚姻が要因か。津島市は転入の時に理由を聞いているか。

(市民生活部長)

転入の理由については、特段聞いてない。

(委員長)

委員から指摘があった通り、何歳の人が転入してきているかで、全く意味合いが変わる。今日の議論では、資料がなく、これ以上議論ができないが、総合戦略全体に関わること。転入という話だと、どの世代で抽出していくかというところだと、4ページ目のところは、20～30歳代の5歳区分になっているので、このようなイメージで20～30、40～50、60以上で把握をしておくことは重要だと思う。検討していただければと思う。

加えて教えていただきたいが、転入理由の調査は、自治体判断で行っているものなのか。

(市民生活部長)

津島市においては、過去も転入理由については聞いていなく、聞いているという自治体も聞いたことがないため、規定の有無については分からない。

(委員長)

様々な政策を考える上では重要かもしれない。なかなか全員が答えてくれるものではないと思うが、政策を考えるときには、有用な情報であるので、気にかけていただければと思う。

「元気で魅力的な都市イメージを形成する」の進捗について、事務局より説明

(委員長)

今の津島のイメージというと、周りからどう見られていると思うか。私の感覚で話すと、知名度はあると思う。愛西市、あま市は新しいが、津島市はあの辺りにずっとある、という感じで、見たこと、聞いたことのない人はいない。あとはお祭り。祭りのことはみんな知っている。ただ名古屋の人からみると、もうイメージはほとんどない。あの辺にある昔からあるまちで古っぽくてお祭りをやるまち。近場から見るとどのような感じなのか。

(市長公室長)

津島のイメージというと、歴史・文化、津島神社、天王祭、秋まつりというイメージが周辺からは強いと思う。最近まちの中でイベントも始めているが、まち中のにぎわいのイメー

ジというものも広がっていくといいと思っている。そういったイメージだけではなくて、全体として、子育て、企業といった面で社会的に知ってもらうことが必要と考えている。

(委員長)

もう一つ。個人的なバックグラウンドを話すと、私は瀬戸市の隣の尾張旭市で育った。瀬戸と津島というのは少し似た感じがしていて、瀬戸は焼き物で全国から人が来るが、古いイメージの町で、名古屋からも距離があって、駅前がパツとしなくて、という感じ。ただ、私は尾張旭の中学校に通っていて、高校は名古屋に行っていたのだが、瀬戸に全然行かないか、ということではなかった。どういうことかという、瀬戸には高校がたくさんあり、中学の同級生もたくさん通っていたので、瀬戸の高校に通っている友達と遊ぶときは、瀬戸を選んで遊んでいた。せともの祭りというイベントもあり、高校生が瀬戸物を買うわけではないが、人がたくさん集まるので、理由もなく集まっていた。だから瀬戸のことを割と知っている。

津島の一つの財産としては、周辺市に比べると高校がたくさんある。旧海部郡エリアの中学の友達も、大抵、津島の高校に通っている、その子たちは、たぶん天王祭の時には集まってくる感じになると思う。そういった拠点性は愛西市、あま市にはないと思う。津島の元気で魅力的な都市イメージを形成するという目標の一番ベースになるものは、既に持っているのだろう。全然知らない、縁もゆかりもない土地ではなくて、友達が津島の学校に通っているという縁があるということだと思うので、そうすると、都市イメージを若い子たちに津島をイメージ付けていくためには、歴史文化も、大切だと思うが、そこに囚われてしまって歴史文化というところをあまり前面に出してしまうと、若い子たちからは、ちょっと自分たちとは違う、とかえって距離感が出てしまう恐れが生まれかねない。イベントを企画するときに、津島=歴史じゃないことをあえてやってもいいのかもしれない。例えば、若い子が集まれば何でもいい、若者にフリマをやらせるとか、そういったのもありなのではないかと思う。あと、子育て環境に関しては、冒頭の所で説明があったが、子ども医療費助成の対象範囲が拡大されるので、子育ての部分については、だいぶイメージが変わる。次は、元気な感じということ打ち出していくというのがこの先。

(委員)

私達は、天王祭の時に天王通りでイベントをやらせていただいている。平成29年については、名古屋の“どまつり”のメンバー450人ぐらいの方に来ていただき、パフォーマンスをやっていただいた。津島の地を感じていただくためには、イベントが終わった後に天王祭を見ていただき、津島というのはこんな歴史もあると、感じていただくことが相乗効果になるのだと思う。今年は、台風で中止になったが、津島市に目的をもって来ていただくイベントを考えていた。商店街は高齢化のためにシャッターが閉まっている店が多いので、フリーマーケットを開催し、80くらいのお店を出す予定をしていた。歴史文化に興味がある方以外にも、特に若い方に来ていただける企画をやって、市外から来る方に何かを目的をもって、それに少し津島の特色をエッセンスとして加えるような仕組みを作り、元気な方たちが来ていただけるというイベントを企画するというのがねらい。おとしは、津島神社の楼門をバックにして、100人位の人に踊っていただいた。CATVにも協力してもらい、その模様は天王通りのモニターで放映していただき、その後、天王祭の状況をそのモニターで最後まで映して

いた。天王川公園だけではなく、津島の西側のエリア全体がお祭りエリアだということ、なかなか市民レベルでは難しい部分があるので、そういう部分も、市のどこかの部署が担っていただきながら、やっていただけるとありがたいと思う。シティプロモーション課等に支援をいただければと思っている。

今度の土曜日には、ハリウッド映画の BASHIRA という映画を津島の観光交流センターで撮影する。アメリカ映画を津島で撮ったという足跡が残せ、ブランド化につながるのではないかと、観光協会と NPO と一緒になってやっている。外部との窓口をどのくらい持てるかというのは、これからのブランド化の勝負なのではないかと思っていて、各制作会社と仲良くなることによって、いろんな窓口ができるのだと思う。そういった窓口をシティプロモーション課がどのくらい持っているのかというのがこれから一番重要になってくると思うので、これは何とか情報共有をしながら一緒にやっていかなければならないと思う。

(委員長)

資料に記載している主要な取組以上に、現実にはこれを飛び越えて色んなことをやっているということが分かり、また、今ご説明いただいた内容はすべからくその通りだと思うので、このペーパーにはないことも含めて着々と進んでいる、実態としては、様々な試みがなされていると感じた。

それでは、資料についてすべて終了したが、1~4の全体を通して何か意見はあるか。ご意見ご質問も尽きたようなので、議題については、すべて終了した。2番目はその他ということで、事務局から。

(企画政策課長)

今後の会議予定について連絡させていただく。来年度になるが、2019年度においても、津島市まち・ひと・しごと創生総合戦略と5月に開催しました地方創生推進交付金の進捗管理と評価検証が必要となるため、当委員会に諮らせていただきたいと考えている。詳細については、事務局からご連絡をさせていただくのでよろしく願います。

(委員長)

ありがとうございました。最後に日比市長から感想をいただければと思う。

(日比市長)

貴重な意見をいただきありがとうございました。津島市では、3年前にシティプロモーション課を立ち上げて、積極的にPRし、それと同時に子育てに力を入れるために子育て支援課を立ち上げた。もう一つは危機管理課、危機に対して的確に対応できるということが、この地域にとっては特に重要ということで、新しくそのセクションを作って責任をもって動いていく。総合戦略の重点戦略を4つ挙げているが、まだまだものになってきていない部分もある。しかし、子育ての関係も子ども医療費助成の対象範囲の拡大が来年4月からスタートし、また、生まれる前から産み育てるまでということで、子育ての相談については、2か所のセンターを設け、子育ての相談を行っている。お金をかけることも大切かもしれないが、子育てでお悩みの方を対象とし、フォローすることが大切だと思っている。多くの職員を配置し

てお悩みの方に対してフォローしているところであるので、ご理解をいただきたいと思う。企業誘致の関係も進んでいる。きらりと光る企業に来ていただいている。そこで雇用が生まれつつある。津島市であれば、まだまだ一定の雇用ができるということも聞き、見直される場所だと考えている。都市イメージについては、若い人に津島をPRしては、というのはまさにその通りだと思う。やはり、思い切ったことをやっていくのは行政だけでは難しいので、民間の力を借りながらネットワークを活用した中で、多世代の方にPRする正念場だと思っている。そういう意味では、祭りというのは若者の熱気が必要だと思う。津島市にはいろんな祭りがあるので、発信していく、その中でいろんな広がりを見つけるのが大切なのではないかと考えている。今日は、色々ご指導いただき、参考になる意見もたくさんいただいたので、総合戦略に取り込んでいきたいと思う。貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。

(委員長)

それでは、この会議は閉じさせていただく。ありがとうございました。